あいさつ運動

【子どもは知らぬ間に強くたくましく成長する。この子の悲しみに私は寄り添えていただろうか】

その中学校は山間の小規模校で、その年の全校生徒数はちょうど100人であった。しかし、2か月もたたないうちに、生徒数は2けたの99人になってしまった。3年生の女生徒が病死したのである。修学旅行には元気に参加できたのだが、それから1月後の急逝であった。

私たち教職員は、自宅に線香をあげに伺った。部屋の隅で小学生と思われる女の子が静かに泣いていた。妹さんである。姉を喪った悲しみは小学生には重すぎるのではないかと思った。

それから2年後、その女の子は中学校に入学し、私が担任となった。彼女は、何事にも積極的に取り組み、部活動では中心選手として活躍した。亡くした姉のことは一切言わなかった。3年生から生徒会を引き継ぐ時、彼女は生活委員会に立候補し、副委員長となった。あいさつを全校、全村に広げたいという。朝、彼女の呼びかけで、生活委員は学校前の道路に立ち、そこを通る全ての人にあいさつをする取組を始めた。中には無反応で通り過ぎる人もいるが、彼女はお構いなしに、大声であいさつをする。こうして、学校内外にあいさつは徐々に広がっていった。彼女の熱意が大きな要因である。

3年生最後の文化祭の弁論会において、彼女は初めて姉のことを語った。姉を亡くした深い悲しみと喪失感。それを埋めるためにも学校を明るくしたいと願ったこと。そのために元気のよいあいさつが飛び交う学校にしたいと考えたことなどである。

あの時部屋の片隅で泣いていた女の子は強く、そして優しく成長したのである。